



News Letter

No. **11** October 2007

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

モダリティの日朝対照研究



生越 直樹
(統合言語科学部門)

このCOEで私が担当している研究課題は、「日本語と朝鮮語の対照研究」というもので、日本語と朝鮮語(韓国語)を比較することにより、両言語の特徴を明らかにすることをめざしている。朝鮮語は最近学ぶ人も増えてきて、どういう言語かを知っている人も多くなった。一言で言うと、日本語に非常によく似た構造を持つ言語である。基本的によく似ているだけに、両言語のちょっとした違いから日本語の特徴あるいは朝鮮語の特徴が見えてくる。

日本語と朝鮮語の対照研究は、従来テンスやボイスなどの文法範疇に関する研究が多かったが、最近は談話分析や言語行動など社会言語学的な研究も多くなってきている。この傾向は現代日本語の研究動向と一致している。というのは、日朝対照研究の主な担い手は日本に留学してきた韓国人研究者だからである。日本語研究で盛んなテーマを母語である韓国語と比較して考えてみる、という形で研究を進めることが多いからであろう。ところが、一つ不思議なことがある。日本語研究では1990年代からモダリティの研究が盛んになった。文は大きく分けて出来事の内容を表す命題部分と、内容に対する話し手の態度を表すモダリティ部分に分かれる。述語と格の関係やテンス・アスペクトなどは命題、推量や命令・勧誘などはモダリティに属するとされる。日本語で研究が盛んであるにもかかわらず、このモダリティに関する日朝対照研究はほとんどなされていないのである。

研究がほとんどない理由は簡単で、研究するのが難しいからである。まず、朝鮮語において、モダリティに関する表現の詳しい分析がなされていない。最近少しずつ研究が進んできたが、日本語に比べると数は少ない。もう一つ、モダリティの場合、テンスやボイスに比べて範疇の定義や扱う形態の範囲がはっきりせず、考察する上での枠組みが作りにくい。

確かに研究するのは難しいが、似ていると言われる両言語で話し手の心的態度がどのような仕組みで表現されるかは、研究として魅力的である。朝鮮語にも様々なモダリティ表現があるけれども、意外と日本語とうまく対応しない場合が目につく。たとえば、推量に関する表現は両言語ともに多くあるが、うまく対応しない。おそらく表現の使い分けに関与する要因が違うのであろう。あるいは日本語の終助詞「ね」「よ」なども朝鮮語ではうまく対応する表現がない。

ということで、COEではこれまで研究が少なかったモダリティの日朝対照研究を中心に進めようとしてきた。まだ道は遠いが、成果の一端を報告書の形で出している。今年度は2冊目の報告書を刊行する予定なので、機会があればご覧いただきたい。



Contents

モダリティの日朝対照研究	1
新しい研究動向 — こんな研究をはじめました!	2-3
イベント報告:IMPS2007	4
本プログラムの教育活動	5
若手研究発表支援 — 海外発表を終えて	6-7
活動報告(2007年1月~2007年8月)	8

新しい研究動向—こん

サバン症候群の謎に挑む—どのようにカレンダー計算をしているのか?—

伊藤 匡

サバン症候群にみられる特徴とは、一般的なレベルでの精神上または発達上の障害があるにもかかわらず一部の認知機能に関しては非常に優れた能力または偉才を持つことであり、主に発達障害(精神遅滞を含む)ないしは重篤な精神病(早期幼児自閉症あるいは統合失調症)による重度の精神障害を持つ人々にみられる特異的認知能力である。

我々の研究チームでは、現在2名のサバン症候群の方からの協力を得ている。この2名はアスペルガー障害の診断をうけているが、カレンダー計算(〇年×月△日は何曜日?といった質問に対する計算)において優れた能力を有している(以下カレンダーサバンと称する)。こうした能力に対して発せられる疑問としては、「どのようにしてそのような計算を行っているのか?」ということであろう。

これに関しては当人からの報告によりある程度の方略があることがわかっている。しかし、これまでこうした方略の実証的な検証は行われていない。そこでここでは研究1として「カレンダー計算はどのようにして可能になるのか?」を、研究2ではカレンダー計算時の脳活動について報告する。

○ 研究1:Calendar訓練

健常者に対してカレンダー計算の訓練を行い比較検討した。健常群(大学生12名)に2006年のカレンダーを覚えてもらい(訓練期間は3ヶ月)、カレンダー計算の正答率と反応時間の測定をおこなった。正答率は訓練開始後1ヶ月には平均90%をこえ、反応時間は平均5秒前後で、両結果ともにサバン症候群の結果とほぼ同じであった。また、カレンダー計算方略について内省報告を求めたところ、ほぼ全員が各月の1日を暗記し、それをreferenceとして計算していることがわかった。

Fig.1に示すように各月の1日は正答率も高く(棒グラフ)、反応時間も短い(折れ線グラフ)。そして1日と曜日が同じである8、15、22、29日はreferenceからの距離に応じて正答率は低くなり、また反応時間も長くなる(図中date)。

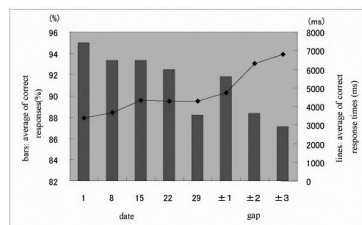


Fig.1 Average of correct responses and response time

またそのようなkeyとなる日付から何日ずれているか(図中gap)ということもカレンダー計算の正答率や反応時間に影響を与えることが明らかになった。

○ 研究2:Calendar-ERP測定

カレンダー計算時の脳活動を解明することを目的として、脳波計(EEG)を用いたカレンダー計算時のERP(事象関連電位)実験を行った。

【方法】

被験者:サバン症候群でカレンダー計算能力を有する男性(17歳)1名(以下Savantと記す)、カレンダー計算訓練を行った訓練群(男性2名、女性3名、平均19.5歳、以下Trained群)、健常成人7名(男性4名、女性3名、平均年齢26.6歳、以下No-trained群)を対象とした。

刺激・課題・手続き:ディスプレイ上に注視点(+)が500ms呈示された後、prime刺激として特定の年の日付が“1/1”のように呈示される(SavantとNo-trained群は2007年、Trained群は2006年)。3000msのブランク画面の後target刺激として特定の曜日が呈示され、prime刺激とtarget刺激が一致しているか/いないかをマウスのクリックにより被験者に判別してもらった。これらを1試行とした10試行の練習の後、本試行として30試行×6ブロック、合計180試行が行われた。

記録および処理:EGI社64チャンネルセンサーネットを用い、0.1~100Hzのバンドパスフィルタをかけた250Hzのサンプリングレートで連続的に脳波を計測し、両マストイド連結により導出した。prime刺激提示前200msの区間の平均電位をベースラインとし、提示後800ms間の波形を検討した。上記解析期間内で電位の変動が100 μ Vを超えたセグメントはアーチファクト混入とみなし、解析から除去した。

【結果】

Tab.1に行動指標の結果を示す。SavantはN=1であったために統計的比較検討は行っていない。Savant、Trained群ともにchance level以上の正答数・正答率であった。SvantとTrained群の比較において前者がやや劣っているが、これは障害の特性や疲労効果などによるものと考えられる。

Tab.1 Number of correct responses & mean reaction time of each group

	正答率	平均反応時間 ^(1,2)
Savant	72%	2047ms
Trained	90.7%	1054ms
No-trained	53.4%	1512ms

⁽¹⁾平均反応時間には正誤答を含む

⁽²⁾target 呈示〜クリック時間の平均反応時間

各群のERPを解析部位に示した電極ごとにFig.2に示す。Fig.2はprime刺激提示時点 onsetとして呈示してある。Trained群とNo-trained群においてはprime刺激呈示後100ms付近で陰性方向でのピークが認められ、その後150ms付近で陽性方向へ転じ、200ms付近では陽性方向でのピークを示している。

それに比してSavantにおいては陰性方向でのピークは安定せず、また陽性方向への転位もほとんどみられなかった。

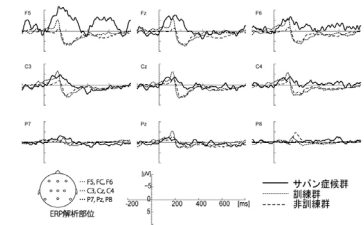


Fig.2 Event-related potentials (ERPs) of each subject

Fig.3に100~148msにおける各群のトポグラフィーを示した。各群において前頭葉領域および正中領域での陰性方向への賦活が見られた。

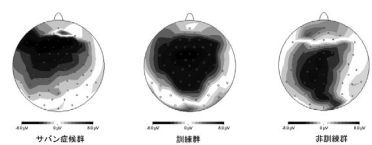


Fig.3 Topography of each subject groups (100-148ms)

【考察】

今回の結果からカレンダー計算の訓練によってサバン症候群と同様のカレンダー計算が可能となることが示された。またカレンダー計算時の脳活動領域がサバン症候群と訓練群において同様の領域(主に前頭前野)で検出されたことから、その計算方略が記憶されたカレンダーの参照枠をイメージして行うというもの(伊藤,2006)とは異なったものであることが示唆された。サバン症候群のカレンダー計算方略がどのようなものであるかはERP波形成分の更なる検討を要する。

サバン症候群の先行研究は(1)記憶術研究、(2)記憶量研究、(3)知能研究、(4)自閉性障害としての研究、と区分できる(伊藤,2004)が、ERPなどを用いた神経レベルでの検討を行ったものは世界的にも類を見ない。今後ERPを用いたサバン症候群の認知機能についての神経レベルでの解明が期待される。

な研究をはじめました!

中国語を母語とする日本語学習者の同形語の認知処理過程

小森 和子

日本語と中国語には、両言語で共通の同形語がある。「緊張」と「紧张」(以下、混同を避けるために、日本語には「**レ**」を、中国語には「**レ**」を、それぞれ付す)がその一例である。中国語を母語とする日本語学習者(以下、中国人学習者)にとって、日本語としての同形語は、母語の中国語の知識を転用できるため、習得しやすいと言われる。しかしながら、同形語には日本語と中国語で意味や用法にズレがあり、中国語の知識を転用すると、誤用が生じるものもある。例えば、日本語の「緊張」と中国語の「紧张」には<tense>という共有義があるが、中国語には<busy>という独自義もある。そのため、中国語では「工作很紧张」という表現が成立するが、これを日本語に逐語的に置き換えた「仕事が緊張している」という文は、正文とは言い難い。また、「暗算」と「暗算」には共有義が無く、二言語で意味が異なる。中国語の「暗算」は<plot, conspiracy>を意味し、日本語のような<mental arithmetic>という意味はない。なお、日本語の「暗算」に相当する中国語は、「心算」である。

このように日本語と中国語で意味用法の対応関係が複雑な同形語を、中国人学習者はどのように心内で認知処理しているのだろうか。質問紙を用いた第二言語習得研究の知見では、日本語の習熟度が高くなると、中国語義を日本語に過剰転用することによって起こる誤用が減ると言われている。しかし、誤用の産出が減少することは、中国人学習者が日本語のレキシコンに正しくアクセスしていることを証明するものではない。そこで、中国人学習者の心内におけるオンライン

の処理過程を観察するために、本研究では、中国語義で解釈すると文意が通るが日本語としては非文となるような文(干渉語条件)、例えば、「*私は仕事が緊張している」、「*私は大親友に暗算した」を中国人学習者に呈示し、非単語を含むコントロール文(非単語条件)と比較して、どの程度迅速に、また、どの程度正確に非文性を判断できるか、検討した。実験に用

いた同形語は、(a) 共有義の他に中国語に独自義がある同形類義語(例:「緊張」と「紧张」)、および(b) 共有義がなく、二言語で完全に意味が異なる同形異義語(例:「暗算」と「暗算」)、の二種類である。なお、実験参加者は、事前に行ったクローズテストで弁別した日本語習熟度の上位群(N=25)と下位群(N=25)である。

実験の結果、日本語習熟度に拘らず、また、同形類義語(Fig.1)も同形異義語(Fig.2)も、干渉語条件文の正誤判断は遅延する傾向が認められた。このことは、日本語習熟度が高くなっても、また、日本語の書字で呈示されても、同形語の日本語義の意味的表象が迅速に活性化しないことを示す。この背景として、中国人学習者は日本語を処理する過程でアクセスしているのは中国語のレキシコンであるため、中国語義が活性化し、それが日本語の処理に干渉的に作用するということが推測される。ただし、共有義のある同形類義語と共有義のない同形異義語を比較したところ、共有義のある方が有意に誤答率が高いことが分かった(Fig.3)。共有義があると、活性化した中国語のレキシコンの中で、当該同形語に内在するその他の中国語独自義も付随的に活性化してしまうため、日本語としての処理が遅延したり、干渉的に作用したりするからではないかと考えられる。しかし、実際の日本語学習の場面を考えると、とりわけ、学習初期段階では、共有義のある同形語の方が取り組みやすいという印象を与える。中国語の知識を利用できるという利点があるからである。しかし、こうした利点は、むしろ、心内における認知処理という点では障害になってしまうと考えられる。

ただし、共有義や独自義といった語義の活性化には、現実の言語運用における語義の使用頻度が関わる可能性が否定できない。例えば、中国語の「紧张」で<tense>と<urgent>とで、実際にはどちらがより高頻度に用いられているかによって、活性化のしやすさは異なるであろう。よって、今後は日本語と中国語のコーパス分析を行い、語義の使用頻度を吟味したうえで、中国人学習者の同形語の処理過程を検討していきたい。

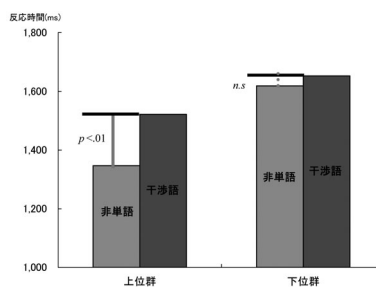


Fig. 1 共有義のある同形類義語の反応時間

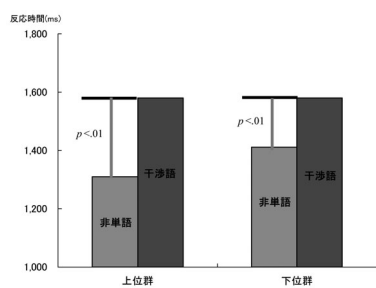


Fig. 2 共有義のない同形異義語の反応時間

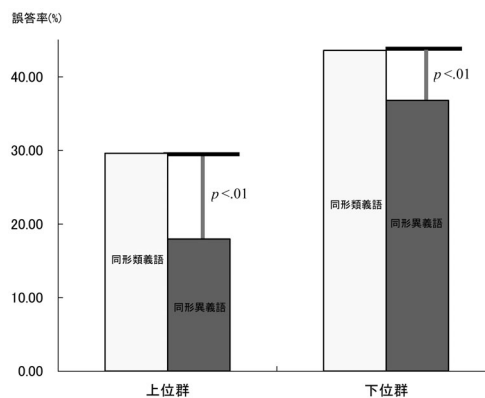


Fig. 3 誤答率における共有義の有無

計量心理学会国際大会報告

(第72回Psychometric Society Meeting)

IMPS2007 (International Meeting of Psychometric Society) が2007年7月9日から13日までワーホール船堀で開催されました。この大会は、2001年に大阪で開催されたことがあり、日本で開かれるのは2回目となります。IMPS2007は、日本行動計量学会、日本心理学会、日本統計学会との共催であり、



また、第72回のPsychometric Meetingという位置づけもあります。このPsychometric meetingは、隔年ごとに北米と欧州で開かれていたものですが、2001年に初めてアジアで開かれ、真の意味でInternationalとなった大会です。

この大会の参加者は、全部で416名でした。国別では、国内から211名、アメリカ68名、オランダ32名、台湾23名、中国17名、韓国とタイが12名などです。計量心理学としては、サーストンの開いた第1回以来、最も沢山の人を集めた大会となりました。アジアで開かれたことを反映して、いつもよりもアジアからの参加者が多いことが分かります。

IMPS2007では、2つの基調講演、8つの特別講演、また、企画セッションにおいて111、一般セッションにおいて154、ポスターセッションにおいて63の発表があり、中味の濃い、充実したプログラムになりました。

今回は、隅田川のボートツアー、江戸東京博物館、茶道(東大茶道部にお願いしました)や飴細工の実演、日光ツアーなどSocial Programにも力を入れました。大会運営について、お褒めの言葉を頂くと同時に、基調講演、招待講演、いろいろな発表が興味深かったという感想を頂いたことが大会運営に関わったものにとって最も嬉しいことでした。



心理的な現象や社会的な現象は数量化することが難しく、進化による影響の証拠を心理社会的な現象に求めようとしても困難なことも多いようです。データに基づき、適切な計量的な方法によって、新しい知見に結びつけることが期待されます。方法論に優れ、かつ、実質的な分野、実際のデータにも関心を持つ多数の研究者が集まったIMPS2007はこのような方法を生み出す場となったことと思います。

(繁樹 算男、心理言語科学部門)

本プログラムの教育活動 2007

○大学院向け集中講義

広域科学専攻「進化認知科学」／言語情報科学専攻「言語情報科学特別講義I」
10月1日(月)～10月3日(水) 2, 3, 4, 5限 534教室

本COEの特任研究員およびゲスト講師によるオムニバス形式の講義である。認知科学の中でも心理学、心理物理学、言語学など複数の分野にまたがる最新の研究成果を、演習を交えながら紹介する。本年度の担当講師・授業内容は以下の通りである。

大江朋子 (本COE特任研究員) 「社会的認知 (対人情報の自動的処理)」
久保寺俊朗 (本COE特任研究員) 「視覚心理物理学入門 (運動の知覚)」
且直子 (本COE特任研究員) 「乳幼児の認知発達」
小林由紀 (本COE特任研究員) 「言語の認知処理—脳波による脳機能計測実習」
岩井智彦 (本COE特任研究員) 「日本手話概説」
Dieter Hillert (Guest lecturer, University of California, San Diego)
"Figurative Language: Cognitive and Neural Correlates"

○前期課程 「テーマ講義:心の起源に挑む:進化認知科学からのアプローチ」 冬学期 水曜4限(10月10日開始) 1313教室

幅広い興味を持つ教養学部1・2年生に向けて、本COEの成果を発信するために毎年入門授業を行っている。2007年度は以下の講師陣による学際的なリレー講義となる。

長谷川寿一 (本学大学院総合文化研究科、本COE拠点リーダー)
イントロダクション「心の起源に挑む:進化認知科学からのアプローチ」
伊藤たかね (本学大学院総合文化研究科) 「埋め込み文構造の脳内処理」
生越直樹 (本学大学院総合文化研究科) 「言語行動から見た日韓比較」
開一夫 (本学大学院総合文化研究科/学際情報学府) 「自己と他者の弁別・認知に関する発達神経認知科学的研究」
石田貴文 (本学大学院理学系研究科) 「人類学のスヌメ」
矢田部修一 (本学大学院総合文化研究科) 「日本語の文法構造と英語の文法構造との間の鏡像関係」
広瀬友紀 (本学大学院総合文化研究科) 「文の理解に関わる諸情報:話し手の意図と聞き手の解釈」
中澤恒子 (本学大学院総合文化研究科) 「空間表現の直示性」
諏訪元 (本学総合研究博物館) 「化石からみた人類の起源」
吉川泰弘 (本学大学院農学生命科学研究科) 「サルとヒトの類似点と相違点」
楊凱栄 (本学大学院総合文化研究科) 「全称詞構文の異なる意味機能に関する中日対照研究」
船曳建夫 (本学大学院総合文化研究科) 「『乳離れ』の意味 自然と文化の両方の観点から」

○後期課程 「進化認知科学セミナー」 冬学期 水曜5限(10月10日開始) 1313教室

駒場キャンパスの2～4年生を対象に開講されるセミナー科目である。上記テーマ講義と同様、メンバーの研究分野の多様性を生かした構成で、例年熱気にあふれた授業となっている。

長谷川寿一 (本学大学院総合文化研究科、本COE拠点リーダー)
イントロダクション「心の起源に挑む:進化認知科学からのアプローチ」
平石界 (本学大学院総合文化研究科) 「"人それぞれ"であることの謎:個人差の遺伝と進化」
佐藤隆夫 (本学大学院人文社会系研究科) 「視線、指さしによるコミュニケーション」
丹野義彦 (本学大学院総合文化研究科) 「なぜ不適応はなくなるのか:精神病理の二面性」
繁樹算男 (本学大学院総合文化研究科) 「人間の特性の遺伝規定性」
加藤恒昭 (本学大学院総合文化研究科) 「言語処理と言語知識・言語資源」
坪井栄治郎 (本学大学院総合文化研究科) 「文法構造の多様性と普遍性」
田中久美子 (本学大学院情報理工学系研究科) 「莫大な言語データに内在する偏りと普遍的性質」
村上郁也 (本学大学院総合文化研究科) 「視覚運動情報処理:世界の安定を実現するためのみち」
上記担当者に加えて海外からのゲスト講師を予定。

若手研究発表支援

海外発表を終えて

6th International Meeting for Autism Research (IMFAR) 報告

長谷川研究室 菊池 由葵子 (総合文化研究科・博士課程1年)

今回、5月3日から5日にアメリカのシアトルで開催された6th International Meeting for Autism Research (IMFAR) に参加し、ポスター発表を行った。私は、"Atypical attention to faces in children with autism: A change-blindness study"というタイトルで、自閉症児の顔への注意について検討した修士論文の内容を報告した。課題は change blindnessを利用して、顔やモノの変化を検出する間違い探し課題であった。定型発達児では、顔の変化の検出よりモノの変化の検出のほうが速く、顔には素早く頻繁に注意が向けられていることが示唆された。一方、自閉症児では、顔の変化の検出とモノの変化の検出時間に違いはなく、定型発達児に見られた顔に対する特異的な促進は見られないことが分かった。

世界中から多くの自閉症研究者が集まり、主催者の手腕によって著名な研究者の講演を多数聞くことができたのは非常に幸運だった。内容も、自閉症の早期発見・介入、遺伝子研究、脳機能イメージング研究など、最新のトピックですら充実していた。これらの成果を活かして、今後は療育に関して研究が進展していくのではないかと感じた。自分の研究分野に関しては、脳機能イメージング研究が急速に増えていることを痛感した。今後の研究では、行動データだけではなく、脳波の計測も視野に入れる決意ができ、この学会への参加は良い刺激になったと思う。

ポスター発表では、修士論文で引用した論文の著者たちと話すことができ、非常に有益であった。熱心な研究者が多く、ハンドアウトはすぐになくなり、帰国してからもメールで情報交換している。まだ論文にはなっていない最新の結果を見ることができ、とても勉強になった。次の実験について、アドバイスをしてくれる研究者とも知り合えたので、今後の研究の進展が期待できる。

10th Annual Workshop on American Indigenous Languages 報告

西村研究室 内原 洋人 (人文社会系研究科・博士課程1年)

2007年5月11日から12日にかけて、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンタバーバラのUniversity of California, Santa Barbaraで開催された10th Annual Workshop on American Indigenous Languagesに参加した。この学会はアメリカ大陸先住民語の研究に関するワークショップであり、北米、中米、南米と広範囲の言語にわたり研究発表が行われた。ワークショップということもあり学生中心であり、アットホームな雰囲気の中活発な議論がなされていた。ワークショップの最後には北米先住民語の母語話者(テワ族)を含めた言語再活性化運動に関する発表もあり、危機言語運動への関心も喚起していた。

私は当ワークショップにおいて口頭発表の機会を得、アメリカ合衆国(オクラホマ州及びノースカロライナ州)において約1万人の話者を有するチェロキー語(イロコイ語族南イロコイ語派)オクラホマ方言の語彙的高声調について、Lexical High Tone in Oklahoma Cherokeeという題目で発表を行った。チェロキー語はかねてより無標の低声調のほか高、超高、低下降の声調があることが知られ、このうち超高及び低下降については様々な研究がなされ、その出現が予測可能とされるが、高声調については語彙的に決まっているものであり予測できないものとされた。また、この高声調はイロコイ語族のうちチェロキー語にのみ特有のもので、イロコイ語族比較言語学においてその存在は長らく謎とされてきた。私は当発表において、チェロキー語動詞の異形態的交替や音韻形態のプロセスに対する振る舞い、比較言語学的な根拠により、この語彙的高声調は基底における声門閉鎖音に由来することを示した。

この学会では、アメリカ大陸先住民語を専門とする若手の学生たちと交流することができ、とても有意義なワークショップとなった。日本にはこうした分野の研究状況はなかなかつかみにくいですが、今後もこうした学会に積極的に参加し、記述言語学をはじめ言語理論一般にも貢献していきたい。

第10回国際認知言語学会 (ICLC 10) 報告

大堀研究室 水野 真紀子 (総合文化研究科・博士課程1年)

2007年7月16日から20日まで、ポーランドの古都クラクフで、第10回国際認知言語学会 (ICLC 10) が開催され、Toshio OHORI, Makiko MIZUNO, Satoru UCHIDA, Anita NAGYによる共同論文"Metaphors of Human Relationship:A Case from Japanese"を発表した。本学会には世界各国から第一線の認知言語学者が集まり、多くの先端的研究が発表された。

今回の発表は「対人関係」というドメインに注目し、メタファーによって認知的に構成される対人関係の理解を日本語を中心に分析した。これまで、「感情」というドメインについては、生理的・客観的な把握対象としての感情と別に、言語的構築物としての感情を分析する試みが多くなされてきた。しかし、対人関係がメタファーを通じてどのように把握されているかの研究はこれまでなく、本発表では日本語の具体例にもとづいて基盤となるソースドメインを分類した。また、英語およびハンガリー語との対照も行った。これらの言語では、日本語と比べて相当部分の共通性はあるものの、メタファー表現が慣習的にもつ価値判断や、一部のソースの使われ方 (例えば、気体・液体をソースドメインとした概念化) では言語ごとに興味深い違いが見られることが報告された。「言語によっていかに現実の事態 (この場合、対人関係) を把握するか?」という観点は、カウンセリングの談話分析などとも連携する可能性を秘めている。

発表では、くつろいだ雰囲気の中で海外の研究者からの貴重なフィードバックが得られた。また、認知言語学のリーダーたちによる基調講演は、言語科学の今後の研究動向をはかる上で重要な示唆となった。なお、次回大会 (2009年) は、カリフォルニア大学バークレー校で開催予定とのことである。

The 5th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (WCBCT) 報告

丹野研究室 杉森 絵里子 (本COE特任研究員)

2007年7月11日から14日にバルセロナで開催された、The 5th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (WCBCT) に参加した。この学会は、認知行動療法における最大規模の学会であり、70以上の国から約3500名 (そのうち日本人は150名) の参加があった。"不安障害""摂食障害""発達障害""精神症"など、臨床分野に関係する幅広い研究領域が扱われており、研究活動をされている方だけでなく、臨床活動されている方の参加も多かった。日頃、臨床活動されている方の生の声を聞く機会がないため、いい刺激を受けた。

私は、口頭発表とシンポジウムの2回発表する機会を得た。口頭発表では、"Issues in Psychosis And Severe Mental Health Problems"というセッションに参加し、丹野先生と共同で行っている研究を、"Effects of Positive and Negative Delusional Proneness on Memory"というタイトルで発表した。そこでは、ネガティブな妄想傾向のある人とポジティブな妄想傾向のある人によって、性格を表す形容詞を記憶する際、保持期間における変容の仕方が異なることを示した。シンポジウムでは、丹野研究室のメンバー5人が、"Cognitive Behavioral Approach to the Psychology on Symptoms of Psychosis"というタイトルで、統合失調症傾向の大学生を対象にした実験を発表した。私は、そのうちの1人として、統合失調症傾向における幻聴と記憶の関係について発表した。統合失調症傾向の大学生を対象としたアナログ研究を行うことの意義や、臨床的な心理療法と並行させて、患者の認知メカニズムを検討することの意義を唱えることができたと考えている。次は3年後にボストンで開かれる。3年後にも、さらによい研究を行って発表できたらと考えている。



シンポジウム後、シンポジウムで発表したメンバーと撮った写真

活動報告 (2007年1月~2007年8月)

1 COE 研究発表会 (事業推進者等の研究発表・討論会)

第54回: COE研究会: オープンラボにおけるPDポスター発表会

日時: 2007年6月1日 (金) 12:00~17:30
場所: 東京大学駒場キャンパス17号館COEオフィス
発表者:

且直子、濱崎裕子、大江朋子、角恵理、高橋麻理子、伊藤匡、久保寺俊朗、高橋泰城、植月美希、小林由紀、岩井智彦、戸次大介、小森和子、宮崎美智子、杉森絵里子、高雄さとみ、宇野良子

第55回: COE研究会: オープンキャンパスにおけるPDポスター発表会

日時: 2007年8月2日 (木) 13:00~16:30
場所: 東京大学駒場キャンパス17号館COEオフィス
発表者:

且直子、濱崎裕子、大江朋子、角恵理、高橋麻理子、伊藤匡、久保寺俊朗、高橋泰城、植月美希、小林由紀、岩井智彦、戸次大介、小森和子、宮崎美智子、杉森絵里子、高雄さとみ、宇野良子

2 COEシンポジウム・セミナー(共催のものも含む)

第41回: COE共催セミナー: UTCP連続セミナー

「行為、意思、意識—主観的経験の神経科学」
日時: 2007年1月16日 (火)、18日 (木)、19日 (金)
場所: 東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1
講演者とタイトル:
下條信輔 (カリフォルニア工科大学教授)
第1回 「主観的経験は特権のか—イエス&ノー」
第2回 「主観的意識体験の時間的構造」
第3回 「自発的な運動の神経学的メカニズム」
第4回 「主観的体験の直接性・無謬性という錯誤」
第5回 「真正のイリュージョンとしての自由意志」

第42回: COE共催シンポジウム: 第7回日韓対照研究会

日時: 2007年3月16日 (金) 13:00~17:00
場所: 東京大学駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム3
担当: 生越直樹
講演者とタイトル:
文鶴鶴 「終助詞『ね』の意味」
申鉉竣 「不可能表現についての日・韓対照研究」
森山卓郎 「ひきのばし音調—日韓対照研究にむけて—」

第43回: COE共催シンポジウム: 国際計量心理学会大会IMPS2007

日時: 2007年7月9日 (月)~13日 (金)
場所: 東京都江戸川区タワーホール船堀
担当: 繁榎算男
主催: Psychometric Society

3 COE主催・共催研究会

第93回: COE主催講演会: パロン=コーエン博士来日記念講演会

日時: 2007年4月6日 (金) 13:00~16:30
場所: 東京大学駒場キャンパス数理科学研究科大講義室
担当: 長谷川寿一
講演者とタイトル:
千住淳 (ロンドン大学) "Eye gaze processing in autism: Atypical specialization of the social brain?"
若林明雄 (千葉大学) "Is it possible to expand the EMB theory to typical developed population: Individual differences in cognitive styles based on the Empathizing-Systemizing Theory"
Simon Baron-Cohen (ケンブリッジ大学) "Is autism an extreme of the male brain?"

第94回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

日時: 2007年3月25日 (日) 13:00~
会場: 東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4
担当: 田中伸一
講演者とタイトル:

小松雅彦 (北海道医療大学) 「英語と日本語は周波数が違うのか? 英語学習教材の科学的根拠」
西村康平 (東京大学大学院) 「日本語音韻論における reduplication と dvandva」

第95回: COE共催講演会: 中原裕之講演会

日時: 2007年4月4日 (水) 16:00~17:00
場所: 東京大学駒場キャンパス2号館308 (大会議室)
担当: 村上郁也
講演者とタイトル:
中原裕之 (独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター 理論統合脳科学研究チーム) "Integrated theoretical neuroscience"

第96回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

日時: 2007年4月29日 (日) 13:00~
会場: 東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4
担当: 田中伸一
講演者とタイトル:
孫範基 (東京大学大学院) 「現代日本語における母音連続の回避」
岡崎正男 (茨城大学) 「中英語期における子音連結の消失— Minkova (2003) の批判的検討」

第97回: COE共催イベント: 公開ワークショップ「認知言語の学び方4」

日時: 2007年5月5日 (土) 13:00~16:30
会場: 東京大学駒場キャンパス10号館L103教室
担当: 大堀壽夫
講演者とタイトル:
野村益寛 (北海道大学) 「認知文法の思考法」
討論: 「比喩の認知的研究の現在」
共催: 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、大学院人文社会系研究科言語学教室

第98回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

日時: 2007年5月27日 (日) 13:00~
会場: 東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4
担当: 田中伸一
講演者とタイトル:
榊原健一 (北海道医療大学) 「喉歌 (ホーメイ、ホーミー) における音源生成」
竹村和浩 (TTL言語研究所) 「英語周波数と脳科学の接点—未科学からの出発—」

第99回: COE共催研究会: 電子情報通信学会 思考と言語研究会 (TL) 7月研究会

日時: 2007年7月14日 (土)~15日 (日)
会場: 広島大学東広島キャンパス学士会館2階レセプションホール
担当: 広瀬友紀
テーマ: 人間による言語の理解・算出・獲得
共催: 広島大学大学院教育学研究科「育む・学ぶ」ことばの脳科学プロジェクト研究センター

第100回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

日時: 2007年7月22日 (日) 14:00~
会場: 東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4
担当: 田中伸一
講演者とタイトル:
小島千里 (インディアナ大学大学院) "A Conspiracy in Uzbek: Vowel Insertion and Consonant Deletion"

第101回: COE共催講演会: ビュートララー講演会

日時: 2007年7月26日 (木) 14:00~16:00
会場: 東京大学駒場キャンパス16号館127教室
担当: 丹野義彦
講演者とタイトル:
ラリー・ビュートララー (パシフィック大学大学院) 「エビデンスにもとづくストレスマネジメント: Systematic Treatment Selectionの理論と実際」

東京大学 21世紀COE「心とことば—進化認知科学的展開」

〒153-8902 東京都目黒区駒場3丁目8番1号
東京大学駒場キャンパス17号館

TEL / FAX 03-5454-6709

ホームページ <http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp>

発行日 2007年10月20日